

日本論 日本人には
論理的には
考えることが
本当
に
苦手なのか

日本人は情緒豊かだが非論理的。
これは日本人の民族としての特徴である。
——本当にそうなのだろうか？

根強い「日本人論」の通説を比較文化の心理学の成果から徹底検証。
文化差にまつわる偏見やステレオタイプから開放されるための、
オリエンタリズムの正しい葬り方。

山祐嗣

Yama Hiroshi

新曜社

日 本 人 は
論 理 的 に
考 える こと が
本 当 に
苦 手 な の か

山 祐 嗣
Yama Hiroshi

新 曜 社

はじめに

TVやインターネット、あるいは新聞などにおける意見・コメントで、「日本人は○○だから〜なのですよ」という「説明」を頻繁に見聞きする。そのときの私の感想は、まず「日本人が他国の人々と比較して本当に〜なのだろうか」とか、「そもそも日本人って本当に○○なのだろうか」である。そして、「○○だから〜」という因果的説明が科学的に妥当といえるのだろうかという疑問で、頭の中がいつぱいになる。もちろん、このようなコメントは学術論文とは異なるので、科学的厳密さを求めなくても良いのかもしれない。しかし、明らかに間違っていたり、あるいは日本人についての歪められたステレオタイプが視聴者や読者に刷り込まれようとしていたりすると、やはり放置すべきではないと思えてしまう。

人間の思考が論理的なのかどうかを研究し続けてきた私が、比較文化に興味を抱きはじめてのは14年前である。そのときに私が漠然と抱いていたイメージは、「日本人の思考は非論理的」というものであった。当時は、日本人は、デベートが下手で、情緒的で、また使用している言語が非論理的で、総じて非論理的であると考えられていたし、私自身もそう思っていた。上の「説明」にあてはめれば、

「日本人は情緒的だから非論理的なのですよ」ということになる。私はその言説を鵜呑みにし、日本人が非論理的であるにもかかわらず、明治以降、急速に発展して産業国、先進国になりえたのはなぜなのかを明らかにしたいと思うようになった。

しかし、本書の内容を読んでいただければわかることだが、ここ20年ほどの心理学における比較文化的な研究から、日本人が非論理的という言説は、かなり疑わしいと言えるようになった。本書では、文明的な発展にはどのような要因が重要かについて7章で言及もしているが、「日本人が非論理的であるにもかかわらず産業国になった」という問題は存在しないものとなり、主として論じたのは、イタリアにもあるように、本当に非論理的なのかという問題である。

ある程度この領域に精通していた私でさえも抱いていたこのような誤解は、現在でも、かなり多くの日本人に共有されていると思う。この、人々に共有されている思い込みを何とか是正していきたいということが、私が本書を執筆した最も大きな動機であり、目的である。一般的に、学術領域全般に言えることかもしれないが、国際的な学術雑誌ですでに否定されていることや疑問視されていることが、メディア等では通説としてまかり通っていたりすることが少なくない。もちろん、学術雑誌に掲載されている論文での知見・主張がすべて正しいわけではないが、少なくとも、当該領域についての世界の第一線で活躍する研究者によるピアレビューと呼ばれる審査過程を経ており、その時点で最も信頼できるものと言える。通説がこのような学術雑誌の知見・主張と乖離する傾向は、人文・社会系の領域でよく見られる。特に、専門家ではなくとも意見が言えそうな政治や教育などにおいて顕著な

のではないだろうか。それらの領域の一つである心理学でも例外ではない。メディアで発言をする人たちがそのような学術誌に目を通すということがめつたになく、また、学術雑誌での知見をわかりやすく一般に伝える研究者も少ないという実情から起きていることであろう。さらに、メディアでは商業主義を無視することができず、科学的知見よりは人々の興味を引くものが優先され、このような現状に至っているのだろう。心理学領域における最もひどい例の一つがA B O血液型性格判断だと思いが、これも、何度否定されてもギリシャ神話の怪物ヒュドラのように死なない。

文化比較、特に日本文化に関係するテーマも、このような傾向が強い。特に問題なのは、いわゆる「日本人論」と呼ばれている書籍である。本書でも、最終章においてこの「日本人論」に言及し、ここで、船曳建夫やベフハルミの見解を紹介している。彼らによれば、そして私も実際に同意するのだが、日本人論は、その多くが比較文化の専門家によって書かれたものではなく、また厳密な科学的比較文化研究によって得られた知見に基づくものでもない。その学術的妥当性に疑義があるものが大半なのである。とくにベフハルミは、「多くの日本文化論あるいは日本人論はイデオロギーにすぎず、大衆消費財のようなものである」と断罪している。比較文化論におけるイデオロギーは、偏見や偏狭なナショナリズムと容易に結びつきやすく、放置は危険なのである。

本書では、科学的な根拠を求めながら議論を進めているので、国際的な学術雑誌に掲載されている比較文化研究が常に参照可能であるようにしている。それで、本文中では、研究成果の紹介や主張を行なっている人名の後に、アルファベット表記での研究者名と論文の出版年を記している。煩わしく

思われるかもしれないが、ご容赦いただきたい。該当する書誌情報は、巻末の「引用文献」にリストされている。また、学術雑誌に掲載されている研究論文を紹介するさいは、専門外の読者の方々にもできるかぎりわかりやすくということを中心に心がけたが、どうしても難解な箇所が生じてしまう。これについても、ご寛恕願いたいと思う。

本書では、「論理のかどうか」に注目しているので、他の比較文化的な側面についてはあまり深く言及していない。それでも比較文化を、あるいは日本人の文化的特徴について語るには、どのような基準が必要かは明示している。最も重要な点は、文化差が事実として同定できれば、それをどのような説明するかである。本書では、6章と7章でどう説明すべきかを議論しているが、ここは私が最も精力を込めて執筆した部分である。私は、イデオロギーに囚われずに科学的に説明することが、文化差を最も公平に俯瞰できるものだと考えており、このような不断の努力が、近い将来に文化差にまつわるさまざまな偏見やステレオタイプから私たちを開放してくれると信じている。なお、「論理のかどうか」以外で本書の中で言及した比較文化的通説の一つが、「日本人は自然を愛する民族である」という主張である。これはむしろ日本人の肯定的特徴とされているのだが、最終章で、かなり大きな疑義を提起している。

謝 辞

本書を執筆するにあたって、多くの人々のお世話になった。まず、私に人間の認識についての心理学を最初に教えてくださった京都大学名誉教授の故梅本堯夫先生と、同じく京都大学名誉教授の清水御代明先生、神戸親和女子大学の多鹿秀継先生にお礼を申し上げたい。また、人間がどのように思考するかについては、英国のウォルヴァーハンプトン大学名誉教授のケン・マンクテロー先生、ダラム大学のデヴィッド・オーヴァー先生、およびロンドン大学バークベック・カレッジのマイク・オークスフォード先生に、研究の哲学的背景から実施のノウハウまで、ずいぶんと教えていただいた。彼らは、この15年余りの間の、私の指導教員のような存在である。

比較文化研究の共同研究者として、成均館大学のド・キュンスー先生、リヨンの認知科学研究所のジャンーバプティスト・ヴァン・デル・エンスト先生、パリ第8大学のジャン・バラトジン先生、ヌーシャテル大学のユーゴ・メルシエさん、カンザス州立大学のゲーリー・ブレース先生、ウタラ・マレーシア大学のノーハヤチ・ザカリア先生とシャフィツ・モフード・ユソフ先生、ウォルヴァーハンプトン大学のナイアル・ガルブレース先生、上智大学の出口真紀子先生、日本大学の川崎弥生さん、

元大阪市立大学研究生の張波さんの名前をあげたい。以上の方々には、これまでの比較文化研究において過大な助力をいただいている。

京都大学の田窪行則先生、楠見孝先生、名古屋大学の唐澤穰先生、ライ・ウェイリン先生、戸田山和久先生、神戸女学院大学の小林知博先生、立命館大学の服部雅史先生、服部郁子先生、朴真理子先生、慶應義塾大学の平石界先生、北星学園大学の眞嶋良全先生、東京電機大学の高橋達二先生、高槻赤十字病院の岸本寛史先生、龍谷大学の郷式徹先生、神戸大学の林創先生、大阪教育大学の高橋登先生、大阪府立大学の岡本真彦先生、名古屋大学の中村絃子さん、大阪市立大学の新居佳子さんには、学会でのシンポジウムや研究会などで貴重な意見交換などをさせていただいている。これまでにいただいたコメント等は、本書の随所で活用されている。

本書の執筆途中で、ウィスコンシン大学の宮本百合先生からは、ご自身の研究内容について私の質問に対する丁寧な回答をいただいた。また、私が知らなかった研究資料について教えていただいたりもした。本書でも論文を引用しているが、宮本先生は、感情面での比較文化研究についての研究の世界的な第一人者である。

また、私が現在所属している大阪市立大学に赴任して5年目となるが、大学の同僚の先生方にもずいぶんとお世話になっている。心理学の池上知子先生、川邊光一先生、佐伯大輔先生には日ごろからご研究の最新情報をいただいております、また歴史学の井上徹先生、草生久嗣先生からは歴史的な東洋と西洋の比較について教えていただいている。

以上の方々に、心からのお礼を申し上げるとともに、本書の草稿を読んで下さった大阪市立大学の西優里さん、妻でもあり深層心理学の立場から比較文化についての討論を仕掛けてくる京都学園大学の山愛美氏、そして、この出版不況の中で本書の出版をお引き受けいただき、かつ草稿について修正のための貴重なコメントを下さった新曜社の塩浦暲社長に、厚く感謝の言葉を申し上げます。

目次

はじめに *i*
謝辞 *v*

1章 19世紀の亡霊

- 1-1 日本人は劣等民族？
1-2 本書の概観

1

1

2章 人間は論理的なのか

- 2-1 人間は論理的であると考えられる理論
2-2 人間が非論理的であるとする証拠
2-3 内容による影響と進化心理学的理論
2-4 2種類のシステム

19

19

27

29

36

2-5	人間は論理的なのか	42
3章 「論理的」とはどういう意味か？		
3-1	論理学は「論理的」を保証するか？	45
3-2	論理学は「合理性」を保証するか？	51
3-3	論理学は「直観的正しさ」を保証するか？	58
3-4	この章の結論——論理的とはどういう意味か	61
4章 東洋人の弁証法		
4-1	西洋的な教育を受けていない人々の思考についての研究	67
4-2	西洋人の規則基盤的思考と東洋人の弁証法的思考	71
4-3	東洋人は、本当に弁証法的なのか	79
5章 もし東洋人の弁証法的思考傾向が高いとすれば		
5-1	西洋人の分析的認知と東洋人の全体的認知	85
5-2	論理的思考と知能指数	90
5-3	柔軟な思考としての弁証法	95

6章 思考の文化差をどのように説明するか 103

6-1 認知や思考の民族差は遺伝子による差異か？

6-2 西洋の個人主義文化と東洋の集団主義文化

6-3 文化的伝統としての素朴弁証法と陰陽思想

6-4 言語とコミュニケーション

123 117 110 103

7章 文化的適応の理論に向けて 133

7-1 文化のビッグ・バン

7-2 地勢的・気候的・生態的要因による文化多様性の説明

7-3 比較文化の心理学における社会生態学的アプローチ

146 138 133

8章 終わりに 155

8-1 文化差の過大視

8-2 日本人論として

161 155

引用文献 (3)

索引 (1)

1章 19世紀の亡霊

1-1 日本人は劣等民族？

日本人は、非論理的なのだろうか。私たちの中には、日本人の思考が非論理的だと信じている人はかなり多いのではないかと気がする。しかし、そう信じている人たちが、すべて同じような根拠で同じように考えているわけではない。日本人が非論理的であるとする主張の根拠としている現象はさまざまであり、また「ではなぜ、日本人は非論理的なのか」という理由も、人によってずいぶん異なるのではないだろうか。太平洋戦争時における、思考停止に陥ったのではないかとさえ思われる集団意思決定を根拠にする人もいるだろうし、マスメディアから流される日本の政治家の失言から、そのような政治家の知性を疑い、さらにその政治家に投票した日本人の思考力を根拠にする人もいるだろう。また、「日本人は情に厚く、理屈（論理）よりも情を重んずる」ということを漠然と信じて

いる人もいるかもしれない。さらには、19世紀に唱えられていた、アジア人やアフリカ人は西洋人に比較して劣等民族であるとする西洋至上主義に、現在でも同意する人がいるかもしれない。さすがに民族の劣等性にまでは同意していなくても、それでも科学・近代的産業などの発展が遅れたアジアは、文化的に西洋より遅れており、そのような文化で育った日本人は思考力が劣っていると信じている人は少なくないかもしれない。

たとえば、ある企業の会議で自分の「論理的」な意見が通らなかったとき、「だから日本人は非論理的なのだ」と、怒りながらつぶやく男がいたでしょう。このとき、彼はどのような理由で日本人の非論理性を主張しているのだろうか。まず、彼は、その会議での結論が「論理的」ではなく、自分のほうがより「論理的」な結論を主張したという信念があるかもしれない。この場合の彼の「論理的」という意味は、「企業としてより合理的」、つまり、「彼が所属する企業の目標に照らして、効果が期待できる手段を選択している」ということかもしれない。彼は、自分の主張する手段が目標に対して最も効果的であると信じているので、それ以外の意見は「非論理的」なのである。そして、なぜ現実には彼が反対した「非論理的」あるいは「非合理的」な結論が下されたのかという理由として、日本人に特有とされているいくつかの特徴、たとえば「タテ社会である」（たとえば、中根 1967）とか「集団の調和を重んずる」などの特徴を思い出しているかもしれない。そして、「タテ社会の日本では、結局は社長の言うことには誰も反対できないのだ」とか「付和雷同的な連中ばかりだ」と心の中でつぶやきながら、「日本人は非論理的」という結論を下しているのかもしれない。

仮に、彼が主張していた意見が最も「論理的」であると仮定すると、彼が考えるように、その意見を採用しない同僚・上司たちは「非論理的」になる。仮にこの判断がほぼ正しいとすると、彼の頭の中には、どんな信念が渦巻いているだろうか。まず、「日本人は所詮アジア人だから、白人である西洋人よりは劣っているのではないか」という可能性である。「劣っている」とはどういうことなのかは定義することが難しく、また、この信念は多くの研究者に否定されているにもかかわらず、漠然とこのように考えている人は少なくないかもしれない。実際、現代使用されている論理学や哲学の主要な源流はギリシャ哲学にあり、近代物理学の祖のニュートンは西洋人であり、産業革命は英国で起き、多くの植民地を獲得したのは西洋列強であり、ノーベル賞受賞者は圧倒的に西洋人が多く、現在でも裕福なのは概して西洋の国々である。

19世紀の西洋列強による植民地化の過程で、人類の中で優れているのは西洋人であり、アジア人やアフリカ人は劣等民族であると考えた人々は多かった。サイード (Said, 1978) は、ヨーロッパ人にとって、中東以東は、歴史的に、キリスト教徒は異なった、異質で不気味なものであるとされてきたと述べている。このようなイメージは、言説として西洋の文学をはじめとする諸々の文献の中で現われており、とくに、イスラム帝国 (サラセン帝国) によるスペイン征服やオスマン・トルコによるコンスタンチノープル陥落の歴史を残してきた中東のムスリムは、邪悪で恐るべきものという見方をされている。さらに、その向こうの、灼熱のインドに住む人たちは裸の野蛮人であり、極東の中国人は西洋人の理解や想像の範囲を超えていた。そのアジア・アフリカ観は、ナポレオンのエジプト遠征や

英国によるインドの植民地化の過程で顕著に現われていた。その植民地化の理由の一つが、「劣った彼らは西洋人による庇護と啓蒙が必要だ」という判断なのである。これらの言説は、オリエンタリズムという概念にまとめられている。

ダーウィン (Darwin, C. R.) 自身は意図しなかったにせよ、彼の唱えた進化論はこの思い込みに當時の人々が科学的と信じた根拠を与え、自然選択 (natural selection) によって西洋人が種として優秀な民族になったとする信念を形成してしまった。それだけではなく、ゴルトン (Galton, F.) によって、社会運動としての優生学 (eugenics) が提唱されるに至った。これは、生物の遺伝構造を改良することで人類の進歩を促そうとする科学的な社会改良運動で、「自然」ではなく、優秀な遺伝子の「人為的」選択をめざしたものである。これが、西洋人至上主義と結びついて、アーリア系人種を世界で最優秀な民族にするためのナチスによるホロコーストの理論的根拠となった。また、オーストラリアでの先住民への隔離・同化政策にも結びついている。

また、当時の社会の進歩についての理論にダーウィンの進化論が取り入れられて作られたのが、社会進化論 (social Darwinism) である。この理論によれば、有能な個人が生き残りに有利であると同じように、優れた社会・文化が勝ち残りつつ発展していくと主張され、19世紀の時点で、西洋社会が最も進んだ状態にあると考えられていた。進化論という命名がなされているが、これは種についての自然選択のあくまで比喩的な適用であり、ダーウィン自身の進化論からは逸脱している。優生学にしる、社会進化論にしる、これらの考え方は、適者生存・優勝劣敗という発想から強者の論理となり、西洋

列強による侵略や植民地化を正当化する根拠になった。

これに対して、文化相対主義 (cultural relativism) は、西洋至上主義や社会進化論に対する強烈な批判として位置づけられている。たとえば、この中心的主唱者であるボアズ (Boas, 1911) は、すべての文化は優劣で比べるものではなく対等であると主張した。これは、ある社会の文化の洗練・発展の先進性はその外部の社会の尺度によって測ることはできないという倫理的な態度に基づくものである。この議論は、本書でも取り上げる「何が合理的なのか」という論争とも関係する。文化相対主義では、それぞれの文化の中に特有の合理性基準があり、その基準に照らせば、どの文化も十分に合理的であるとされる。

たとえば、ベネディクト (Benedict, 1934) は、文化は、類型 (type) と呼べるほど固定的なものではないとして、文化の型 (pattern of culture) という表現を用いて、その機能を、人間の集団が永続的な社会生活を営むために必要な一定の思考と行動の型を形成し、保持すると共に、その集団のまとまりを妨げるものを排除したり、無害なものに作り変えたりすることとした。また彼女によれば、文化は、国または部族のメンバーが共有する無意識、すなわち集合的無意識の中に存在し、それは、意識されないことによって世代を超越し、歴史を超越し、環境を超越し、社会的変動を超越し、政治的権力を超越して、長期にわたって変化しない。そして、異なる文化の型同士は、互いに矛盾することが起こりえて、そういう場合でも、どちらが正しく、どちらが不正であるという絶対的判断を下す根拠は存在せず、価値の優劣を見分けることはできないのである。

からにミード (Mead, 1928, 1935) は、南太平洋のサモアやパプア・ニューギニアにおいてさまざまな調査を行ない、「遅れている」とされた彼らの文化が独自の合理性を持ち、西洋文化を基準にして発展の程度を議論することはできないという結論を導いた。彼女を一躍有名にしたのは、「サモアでは、女子は思春期でも鬧達で不安定にはならない」や「男性でも攻撃的ではない文化や、女性でも攻撃的な文化がある」という報告である。この「発見」は、「思春期の女子の精神的不安定さは、身体の生物学的変化によるもので、文化普遍である」、「攻撃性は男性の生得的な性質である」などの当時の常識を覆すもので、このような特徴は、生物学的なものではなく、文化的なものであると主張されるに至った。

文化相対主義は、未開とされた文化に住む人々への偏見や差別を是正する点でたいへん大きな役割を果たした。ボアズやミードがこの主張を開始した1920年代は、「氏か育ちか (nature or nurture)」という論争が盛んなころであり、ミードの調査結果は、「育ち」、つまり文化的影響が、生物学的影響よりもはるかに大きいとすると主張の裏付けとなった。また、文明への批判と自然賛美から生まれた概念に、「高貴な野蛮人 (noble savage)」がある。これは「野蛮人は無知で残虐で攻撃的」とするそれまでの常識を打ち破る思想で、「ヒトの暴力・攻撃性・殺人」は、武器の考案などによる現代文明の産物であり、もともと人間は、道徳的で平和に暮らしており、それが当時未開とされた人々の間に見られるとして、彼らは「高貴な野蛮人」と命名されたのである。この考え方も、自然選択や社会進化によって、西洋社会が最も高度な道徳性を発展させたとする主張に異議を唱えるもので、

「サモアの人々は攻撃性が低く、争いもない」とするミードの「発見」は、この主張の強力な裏付けになったのである。

しかし、文化相対主義には、二つの問題があった。第一は、このミードの研究のざさんさである。これは、フリーマン (Freeman, 1983) による指摘で、文化人類学者としてのパイオニアの一人であるミードも、その研究は現在の基準に照らせば極めて不十分であった。彼女は、サモア語も話せず、サモアの社会に十分に参加することなしに、伝聞で集めた資料から「高貴な野蛮人」や文化相対主義の主張に合致する報告を行なってしまったようである。とくに、女性の思春期の記述の誤りについては、まさか自分たちの話が学術的な本に載ることを夢想もしなかった、サモアの娘たちのふざけ話を真に受けたためであると推測されている。実際、その後に行なわれた現地での調査研究では、ミードが報告した事実はほとんど確認されず、当初は、ミードが調査を行なった1920年代以降、西洋の文化が入ってきてサモア人が変容したのではないかと推測された。しかし、現在では、ミードが報告した「発見」は、その多くが否定されている。さらに、「高貴な野蛮人」については、デイリーとウィルソン (Daly & Wilson, 1988) が、決定的に否定している。彼らは、西洋文明の影響を受けていない人々と現代の都市での殺人の比較を行ない、前者での圧倒的な殺人の多さから、「高貴な野蛮人」が19世紀の人々の願望や空想に過ぎないことを示したのである。

第二は、文化相対主義が、差別や偏見と結びついてしまった優生学や社会進化論に対するアンチテーゼとして、科学的主張というよりはイデオロギー的主張と見なされている点である。実際、文化